

曲江

杜

甫

朝より回つて日々春衣を典す

毎日江頭醉も尽くして帰る

酒債尋常行く処に有り

人生七十古来稀なり

花も穿つ蛺蝶深々として見え

水に点ずる蜻蜓款々として飛び

伝語風光共に流転し

暫時相賞して相違ふと莫かれと

【作者】 杜甫（七一二〜七七〇年）・盛唐の詩人で李白と並び称せられ、中国詩史の上での偉大な詩人である。

字は子美（しび）。少陵（しよりりょう）また杜陵と号す。洛陽に近い鞏県（きょうけん）の生まれ、七歳より詩を作る。各地を放浪し生活は窮乏を極め、安祿山の乱に賊軍に捕らわれる。律詩に巧みで名作が多い。湖南省潭州（たんしゅう）から岳州に向かう船の中で没す。年五十九歳。李白の詩仙に對して、杜甫は詩聖と呼ばれる。

【語釈】 * 曲江…漢の武帝が長安城の東南隅に作った池 水流が之（し）の字形に曲折していたため名づけられた。

現在は一畑となつているが当時は長安最大の行樂地であつた。「きよっこう」とも読む。

* 朝回…朝廷から帰る。 * 春衣…春服。春着。 * 典…質に入れる。

* 江頭…曲江池（ち）のほとり。 * 蝶…あげはちよう。 * 蜻…とんぼ。

* 款款…ゆるやかなようす。 * 傳語…ことづてにする。 * 流轉…移りかわること。

【通釈】 朝廷を退出すると、毎日春着を質に入れ、そのたびに曲江のほとりで酒を飲んで帰ってくる。

酒代の借金はあたりまえのことで行く先々にあり、どうせ人生七十まで生きられるのはめつたにない。だから今のうちに飲んで楽しんでおきたいものだ。

あたりを見ると蝶は花のしげみに見えかくれして飛び、とんぼは水面に尾をつけてゆるやかに飛んでゆくのかな風景である。

私はこの春景色にことづてにしたい。我が身も春光もともに流れに身をまかせ、春のしばらくの間でも、その美しさを賞（め）で楽しみ、そむくことのないようにしようではないかと。

【備考】 七五八年安祿山の乱が平定され、長安で左拾遺（さしゅうい）の官にいたが、宰相房（へん）王（へん）に官（ぼうかん）の敗戦の責任を弁護して肅宗の怒りにふれ、曲江にかよつて酒に憂さをはらしている時

期の作。四十七歳。